

本能寺の変とパワハラ

いきなり私事で恐縮ですが、

親しい会社から歌舞伎座のチケットを頂き、5月に芝居見物と洒落込みました。

晴見通りに面した歌舞伎座は、その正面入口前に飾ってある役者の写真などを眺める人達や、それらの前で三々五々写真撮っている善男善女(笑)で賑わっていました。

その昔ながらの風景に、何故かホッとしました。

平成25年2月に新装なったという歌舞伎座タワーは、そんな歌舞伎座全体を呑み込むようにして聳え立っていました。地下4階、地上29階建ての現代的な巨大ビルです。

広場ふうになっているその地下2階には、しかし、和風小物やお土産の店などが雑然と立ち並び、どこか江戸下町の情緒さえ感じさせてくれました。

余談ですが、ここにある家紋の専門店では我が一族の紋所“丸に地紙”を象嵌細工風に施してあるキホルダーを発見し、つい買ってしまいました(笑)。

また、5階には老舗のお茶屋さんの経営だというお洒落な喫茶室があり、屋上庭園を眺めながら開演までのひと時をここで楽しみました。

この日の演目のひとつは、

『時今也桔梗旗揚(ときはいまききょうのはたあげ)』という芝居で、有名な『本能寺の変』(天正10年6月2日/1582年6月21日)を素材としたものでした。

“東海道四谷怪談”で有名な四世鶴屋南北(1829年没)の作品です。

その一幕目『本能寺馬盥(ハダライ)の場』。

蟄居中の明智光秀(劇中では“武智光秀”)は妹桔梗のとりなしで漸く目通り叶ったものの、信長(劇中では“小田春永”)から盃の代わりに馬を洗う盥(クワイ)で酒を与えられるという恥辱をうけます。

懸命に耐える光秀に、信長は追い討ちをかけるように丹波、近江の領地召し上げを告げ、今後は羽柴秀吉(劇中では“真柴久吉”)の指示に従うようにと命じた上、光秀を馬になぞらえて轡(クツリ)を投げつけます。

更には、光秀の妻皐月が売った髪の毛を持ち出して、流浪時代の貧しかった光秀の過去を満座の中で暴露するのでした。

ここに及んで光秀は謀反を決意するというわけです。

花道を引き上げていく光秀(尾上松緑/音羽屋)の物凄い形相には鬼気迫るものがありました。この芝居の見せ場のひとつです。

おっとおわやあ↗

そして二幕目『愛宕山連歌の場』。

光秀はここで、“ときは今 あめが下する五月哉”と短冊に認めます。

一見、単に雨が降る季節を詠んだ風流な歌のようです。

しかし、『とき』→『土岐』(光秀の本家筋の姓)、『あめが下する』→『天が下知る』(天下を治める)とみれば、その意味は全く違ったものになります。

“土岐は今 天が下知る五月哉”

即ち、光秀謀反の決意表明です。

そこへ聞こえ来る遠寄せの陣鉦太鼓。

既に甲冑姿の光秀は、驚く信長の使者(領地召し上げの伝達に来ていました)を斬り殺し、目を輝かせて信長の宿所・本能寺へと向かうのでした。

緊張感溢れる舞台からは、ハリウッド映画とはひと味もふた味も違う迫力を感じました。

歌舞伎は素晴らしい！

ところで、本能寺の変の真実はどうだったのでしょ

うか？
信長の虐めに対する光秀のリベンジが本能寺の変だとも言われていますが、しかし本当にそうだったのでしょ

そもそも、光秀は謀反を起こさずにはいられないほど信長から虐められていたのでしょうか？

この点に関して二つの疑問があります。

- ① 一幕目、信長が敢えて光秀の妻の髪の毛を持ち出した意味が必ずしも虐めのためとは思えないこと、それが疑問のひとつです。

この髪の毛は光秀流浪時代の貧さの象徴です。

しかし、妻の髪の毛を売ることそれ自体は光秀夫婦の苦勞話、あるいは美談ではあっても、殊更、光秀を貶める出来事とまでは思えません。

そんな髪の毛を突き付けてみても、必ずしも光秀虐めにはならないのではないのでしょうか？

それにも拘わらず信長は光秀に対してその妻の髪の毛を突き付けた。

そこには、虐めとは違う別の意味があったと考える方が自然でしょう。

その意味は、実は、

「貧しかった時代を忘れるな！光秀よ、謙虚になって忠勤に励め！」

という信長から光秀へのメッセージではなかったのでしょうか？

- ② では『本能寺馬盃(ハダライ)の場』の前に光秀に対してなされた蟄居処分はどうでしょうか。

この光秀蟄居の原因は、勅使饗応の際、光秀が自らの家紋である桔梗の紋所を染め抜いた幔幕を用いたことが信長の逆鱗に触れたからだと言われています。

だがこのときも信長は、

「10年早い！光秀、慢心するなよ。」

と言いたかっただけではなかったのでしょうか？

つまり、“髪の毛事件”も“蟄居事件”も、信長にしてみれば決して“虐め”というわけではなく、部下光秀への指導・忠告だったと見るのがより妥当だとは言えないのでしょうか。

虐められたと感じたのは光秀の勘違いではなかったのでしょうか！

光秀はとても緻密で繊細な人だったといわれています。光秀謀反と知った信長をして、

「なんと、光秀！！是非もない、弓をもてい！」

と言われしめ、その後、信長は逃れることもなく燃えさかる本能寺で自刃して果てたといわれています。

緻密で完璧主義の光秀のしかけた謀反。その包囲網には万一にも抜け目のあろう筈はなく逃げ道など決して残されていないことを信長はよく知っていたというわけです。

いわば信長お墨付きの完璧主義。

光秀にはそんな性格の人にありがちな自己に対する必要以上の厳しさや潔癖さ、更にはネガティブな思考傾向があったのではないのでしょうか。

そのため、信長の指導・忠告を虐めと感じてしまったのではないのでしょうか？

上司信長と部下光秀。上司のパワハラか指導かが争点というわけです。

信長の光秀に対するメッセージや指導のしかたは確かに厳しく独善的です。現在の感覚からすれば明らかに指導の限界を超えていると思われまます。

しかし、当時、イヤ戦前までの日本社会では、精神的攻撃、身体的攻撃を伴う指導が普通に行われていました。

信長の言動は現代でこそパワハラとしてNGですが、そんな時代にあっては誰もがその全体を“指導”そのものとして受け入れていたのではないのでしょうか。それにも拘わらず“指導”を虐めと感じてしまった光秀には、それを甘受できる心のゆとり(capacity)がなかったからだと言ったら過言でしょうか。

翻って、信長に部下光秀の気持を理解し、ときにはその意見を受け入れる度量が少しでもあったならば、光秀も謀反などを考えることはなかったかも知れません。

現在の職場でも、指導にあたる上司としては部下の心への配慮は不可欠だし、部下には上司の真意を理解し受け入れる真摯さが必要なことは当然です。

更にいえば、普段のコミュニケーションを通じて両者間に信頼関係を築いて置くことが大切です。

信長と光秀の間にもう少し意志疎通と信頼関係があったならば本能寺の変はなく、もしもそうだったならば太閤秀吉も後の徳川幕府も誕生しなかったかも知れませんね(笑)。

(H28.6.1,井野)

※ パワハラ=パワーハラスメントとは、「職務上の地位や人間関係などの職場内の優位性を背景に、適正な業務の範囲を越えて、精神的・身体的苦痛を与え、又は職場環境を悪化させる行為」と言われています。

パワハラは、次の6個のパターンに分類されています。

- ①精神的攻撃
- ②身体的攻撃
- ③人間関係からの切り離し
- ④過大な要求
- ⑤過少な要求
- ⑥個の侵害

(相談窓口)

- ・労働基準監督署(総合労働相談コーナー)
03-5403-2141
- ・法テラス 0570-078374
- ・みんなの人権110番 0570-003-110
- ・会社相談窓口 03-5253-1111

※ 本能寺の変については、専ら、天下を取りたかった光秀の野望が原因であったとする説や、実は羽柴秀吉が黒幕であったとする説などの諸説があり、定説はありません。